



筑紫女学園大学リポジット

‘Truth’ and ‘Untruth’ in the Bhagavatī Ārādhana

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河崎, 豊, KAWASAKI, Yutaka メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/69

Bhagavatī Ārādhana における「真実」と「虚偽」

河 崎 豊

‘Truth’ and ‘Untruth’ in the *Bhagavatī Ārādhana*

Yutaka KAWASAKI

0. はじめに

真実を語り虚言を避け、適切な言語行為を行なう事が、インド諸宗教で重要な実践項目の一つだった事実を、改めて指摘する必要はなかろう。ジャイナ教も例外ではなく、出家・在家ともに、内容の差はあれ真実語の掟 (satyavrata) の遵守が必須であり、また聖典以来多くの文献中に、適切な会話に関する夥しい規定が存在する。ジャイナ教における真実語と虚言、また適切な言語行為を巡っては、Williams (1963:71-78) やCaillat (1991) の先駆的な研究があり、近年ではジャイナ教におけるこの種の問題に関する資料を網羅的に検討し、それをハーバーマス等の現代哲学、また社会学の視点から分析したFlügel (2009)、その抜粋版たる Flügel (2010) がある。但し、在家信者に関する両派の規則集を網羅したWilliams (1963) は別格として、出家者の言語行為を巡る諸研究は、資料が白衣派聖典とその注釈文献に集中しているきらいがある。そこで本稿は、これまで等閑視されてきた文献のうち、空衣派代用聖典の一つであるシヴァーリア (1～2世紀?) の*Bhagavatī Ārādhana* [BhĀ] を取り上げ、特に真実語の掟に見える *asamtavayana* の検討を試みる。

1. 4種の*asamtavayana*

BhĀ は、修行者が断食死に至るまでの過程を40段階に分けて説く。各vrataは33番目、*anusat̥thi*「連続的指導」で登場する。これは断食死の直前に、修行者の耳元でジャイナ教の主要な教義を囁き「おさらい」させるもので、三宝、5 *mahāvratā*、夜食禁止、*pavayaṇamāyā*、*bhāvanā* が順次解説される。真実語の掟は817詩節から開始され、まず*asamtavayana*に4種ある事が言及される：

parihara asaṃtavayaṇaṃ savvaṃ pi caduvvidhaṃ payattena

dhattam pi saṃjamitto bhāsādoṣeṇa lippadi hu (817)

4種からなる《正しくない (asat) 言葉》全てを、お前は努力して取り除け。大いに自制していても、会話の過失によって塗り汚される。

本詩節は白衣派聖典の新層に位置すると考えられるBhPの97詩節、また白衣派のヴィーラバツダがsaṃvat 1078年に著したとされるĀPVの517詩節と殆ど一致する¹。故に、4種のasaṃtavayaṇaという概念は一見、派を問わず共有されていた如くである。

BhPは直後の98詩節で hāseṇa va kohēṇa va loheṇa bhaeṇa vā vi taṃ asaccaṃ / mā bhaṇasu saccam jīvahiyaṭṭhaṃ pasattham iṇaṃ // と説き、ここからその4種が笑い・怒り・貪り・恐れ (hāsa / koha / loha / bhaa) に基づく虚言である事が分かる。虚言の原因をこの4種とするのは、白衣派では例えば既に Das 4,12 (散文) に出現し²、ジャイナ教の初期から存在する概念である。そしてこれに類似する詩節はBhĀでは827詩節で説かれ、故にこの種の分類をBhĀも知っている (後述 ⇒ 3.)。ところが興味深い事に、BhĀは818～826詩節で、これと全く異なる4区分を提示する。

その4区分はVarṇī (1970:208f.) が記載し、また彼は、アムリタチャンドラのPSU 92-98が部分的にそれらに対応する事も示す。また Williams (1963:72f.) によるとこの4区分が、アミタガティのŚrAや、アーシャーダラのSDhA、また白衣派ではヘーマチャンドラのYŚ 2.57に対するYŚSV³、TAS (S)、更にはTAS (U) にもある事を指摘する⁴が、WilliamsはBhĀには気づいていない。

更に、かつて指摘した如く⁵ ĀPVはBhĀに極めて多くを負うが、ここでも ĀPV 518-520がBhĀ 818-826に対応する。但し、その対応は後に見る通り限定的である。従って、この箇所に限って言うと、ĀPVがBhĀを参照していた可能性が高い点は揺らがないだろうが、何故その様な取捨選択が働いたのかが問題となる。

この様に、BhĀの提示する4区分は、後の文献においてもある程度踏襲されたが、逆にシヴァーリアと同時代、もしくはそれに遡る白衣派の少なくとも聖典文献には見出し得ない。つまり、件の4区分については、BhĀが現時点で最古の資料である可能性が高いが、これまでに当該箇所を扱った研究は存在しない。従って、検討する価値は十分であろう。以下、上述した諸資料に加え、アバラーダ注やアミタガティによるサンスクリット詩節⁶をも考慮しつつ読解を試みる⁷。

1.1 真にある事柄の否定

paḍhamam asaṃtavayaṇaṃ sambhūdatthassa hodi paḍiseho

ṇatthi ṇarassa akāle maccu tti jadh' evam-ādīyaṃ (818)

第一の《正しくない言葉》は、真にある事柄の否定となる。例えば「〔寿命が尽きる〕時機ではない時に人の死はない」という、この様な事などである。

最初の区分は「真にある事柄 (sambhūdattha⁸) の否定」である。その実例はやや解り難いが、

我々が住むこの地上に居る人の寿命 (āyus) の持続時間 (sthiti) の延長はできないが短縮はできるといふ、業理論上の観念が背景にあると考えられる⁹。

空衣派文献では、PSUは対応箇所を欠くがŚrAは6.50で言う「その否定的言明¹⁰」があたり、「創出・持続・消滅と結合する如何なるものも存在しない」が実例とされる¹¹。

白衣派文献ではĀPV は518詩節の1行目に対応し (sabbhūyatthaniseho paḍhamam asaccam na samti jahā jīvā)、実例は「諸ジーヴァは実在しない」である。TAS (U) はTAS 7.9¹² “asadabhidhānam anṛtam” に対しasad- を(1) sadbhāvapratiṣedha (2) arthāntara (3) garhā の3種に分類し、更に(1)を(1-1)sadbhūtanihna (1-2)asadbhūtodbhāvana に細分する。BhĀ のこの部分に対応するのは(1-1)で、「アートマンは存在しない。あの世は存在しない¹³」を例とする。YSSVもTAS (U) を踏襲し、bhūtanihna / abhūtodbhāvana / arthāntara / garhā の4区分 — YSSVはTAS (U) の如く最初の項目を細分しない — を提示し、実例として「アートマンは存在しない。善は存在しない。悪は存在しない」挙げる¹⁴。

一方シヴァーリアは、この区分についても一つの解釈を提示する：

ahavā sayabuddhīe paḍisedho khettakālabhāvehim
avicāritā natthi iha ghaḍo tti jah’ evam-ādīyaṃ (819)¹⁵

あるいは、場所・時・状態について熟考する事なく、自らの知¹⁶により否定する事である。例えば、「ここに壺はない」といふ、この様な事などである。

これは、davva / khetta / kāla / bhāvaという4種の萌芽形nikṣepa¹⁷に基づいた検討を経ず、あるものの存在を否定する事と推察される。つまり、実体 (davva) の点で壺の非存在が認識されたとしても、残余の3つの解釈点についての検討を経ずに「存在しない」と言明する事は、真ではない、という事であろう。これへの対応箇所を持つのはPSUの92詩節¹⁸のみで、その趣旨はBhĀ のそれと基本的に同一と思われる¹⁹。但し、白衣派が真実語の掟の文脈でnikṣepaに絡めて説明する事を全く知らなかったとは思えない。というのは、先に挙げたDas 4,12に対するDasCは、現存Das写本にない、musāvādaをdavva / khetta / kāla / bhāva の4点に分類する一節²⁰に対し注釈するからである。尤も、この点は白衣派聖典伝承史という極めて大きな問題に関わり、この小論でそれを議論する準備が筆者にはないため、今はその事実を指摘するのみとしたい。

1.2 真にないことの表明

第二の区分は asabhūubbhāvaṇa で、端的に言えば「1.1 真にある事柄の否定」の逆である：

jaṃ asabhūubbhāvaṇam edaṃ vidīyaṃ asaṃtavayaṇam tu
atthi surāṇam akāle maccu tti jah’ evam-ādīyaṃ (820)
ahavā jaṃ ubbhāvedī asaṃtaṃ khettakālabhāvehim

avicārittā atthi iha ghaḍo tti jah' evam-ādīyaṃ (821)²¹

真にないことの表明、これが一方、第2の「正しくない言葉」である。例えば「[寿命が尽きる]時機ではない時に神々の死がある」とこの様な事などである(820)。あるいは、場所・時・状態について熟慮することなく、例えば「ここに壺がある」と、この様な事などを表明する(821)。

820詩節の実例は、神々などには寿命の軽減も増加も有り得ない、という業理論上の考えが背景にある²²。本詩節は、空衣派文献ではŚrA 6.49の*asadudbhāvana*が対応する²³が、PSUは対応句を持たない。白衣派文献では、TAS (U) は前述の(1-2) *asadbhūtodbhāvana* が対応し²⁴、ĀPVは518詩節の2行目が対応する²⁵。一方、821詩節に対応するのはPSU 93のみである²⁶。そしてそれは821詩節のそれと基本的に同趣旨である。

1.3 ある存在Aを別種のBと言う

tadiyaṃ asaṃtavayaṇaṃ saṃtaṃ jaṃ kuṇadi aṇṇajādīgaṃ

avicārittā goṇaṃ asso tti jah' evam-ādīyaṃ (822)

第3の「正しくない言葉」は、[何かが] 現に在る〔として、それ〕を別の類〔の何かだ〕と〔言明〕することである。例えば、熟慮せずに牛を「馬である」という、この様な事などである。

一見これは、単純に (a) 或るAを別種 (jāti) のBと言う — 「林檎を梨と言う」の如くである。TAS (U) の(2) *arthāntara* に対する説明も単に「馬／牛を牛／馬と言う」である²⁷。しかし他の対応箇所を踏まえると、異なる理解をすべき可能性も残る。例えばĀPV 519の1行目 (*aṇṇahavayaṇaṃ taiyaṃ nicco jīvo jahā aṇicco vā*) の「恒常的なジューヴァを非恒常的と言う」は、(b) 同一物Aに付随する属性aをbと言う — 「黒馬を白馬という」方向とも取れる。この場合、Aのレベルでは偽でない (BhĀ であれば、「動物」の点では偽でない) 事を含意した可能性がある。あるいは (c) Aに付随する属性 a (nitya) を真逆の -a (anitya) とする、とも理解し得る。ŚrA 9.51はこの区分を*viparīta*と称する²⁸。その実例「束縛を伴う者を束縛を離れている者と、束縛を離れている者をもここで束縛を伴う者と主張する」は、*viparīta* 「逆」を用いる以上、その理解の方向は(c)かと想像される。他方、PSU 94「[或る]事物が現にあるとしても、それ自身の特性 (*svarūpa*) とは別の特性 (*pararūpa*) に基づいて言及する」²⁹は、逆に (b) の理解である可能性が高かろう。

2. sat / satya概念の拡大

以上は、基本的にsat / asatという語自体の原義に適う区分と思われるが、第4の区分では、その言明自体が真実在否か、ではなく、その言明によって過失 (dosa) が生じ得る言明をasat という概念下に収める点が注目される。シヴァーリアによれば第4の区分は以下の如し：

jaṃ vā garahidavayaṇaṃ jaṃ vā sāvajjasamjudam vayaṇam

jaṃ vā appiyavayaṇam asattavayaṇam cauttam ca (823)

第4の「正しくない言葉」は、(4-1) 非難される言葉 (4-2) 罪過に結びついた言葉 (4-3) 好ましくない言葉である。

空衣派文献では、これら3区分がほぼそのままの用語で ŚrA 6.52³⁰、PSU 95³¹でも踏襲される。一方、白衣派文献では、TAS (U) は (3) garhā の下、若干の例を挙げるのみ³²で、BhĀ の如く明確に3区分されていないが、TAS (U) を踏まえたであろう YSSV (p.325) は (1) sāvadyavyāpāravarttanī (2) apriyā (3) ākrośarūpā の3種 (tridhā) からなるとする。ĀPV は第4の区分に「多くの種類からなる sāvajja な言葉」を519詩節の2行目で挙げる³³が、520詩節の1行目で sāvajja、2行目で appiyavayaṇa を説明する体裁で、sāvajja の下位区分に再び sāvajja と、そして appiya が存在するという、やや歪な2区分である。

何れにせよ、これらは全て、真実か否かとは直接関わらず、倫理的な「正しさ」「適切さ」を問う概念である事は明白で、Schubring (1935:103 [§74]) が “...eine rede, die aus Gemütsbewegung entspringt, eo ipso als *mosā* gilt.” と述べた事が該当する例である。また以下の内容が直接に真・偽と関わりがない事は、BhĀ 自身意識していた節がある。後の845詩節で「嘘を言う者 (alika vayaṇa) に生じる、この世とあの世に属する諸過失 — 他ならぬそれらは、荒い言葉などにも属する諸過失であると認識されるべきである³⁴」と、念を押すかの如くに断るからである (cf. 注31,32)。

2.1 非難される言葉

kakkasavayaṇam³⁵ niṭṭhuravayaṇam pesuṇṇahāsavayaṇam ca

jaṃ kiṃci vippalāvaṃ garahidavayaṇam samāseṇam (824)

(4-1-1) 荒い言葉 (4-1-2) 酷い言葉 (4-1-3) 誹謗の言葉 (4-1-4) 笑い〔をもたらす〕言葉 (4-1-5) 何であれべらべら喋る事が、要約すると (4-1) 非難される言葉である。

対応する PSU 96 も鍵語の羅列に終始し、niṭṭhura が asamañjasa 「不似合いの」に変わり、また anyad api yad utsūtram 「教典に反する他のもの」を追加する³⁶。一方、ŚrA 6.55³⁷で挙がる garhya な言葉の例として挙がる「殺す事」等は、BhĀ 825 の内容に対応するが、アミタガティがその様な配置転換をした理由は判然としない。以下、正確な理解の為には個々の語彙研究を必要とするが、此処ではひとまずアパラージャ注を見る：

(4-1-1) をアパラージャは、「傲岸さを伴う言葉 (sagarvavacana)」とする一方、別の者たちの説として「非真実の言葉 (asatyavacana)」とする解釈も示す³⁸が、これら2種の解釈の源泉は不明である。

(4-1-2) については Skt. 化するのみである。

(4-1-3) についてはアパラージャは「他者の過失の伝達を専らとする言葉³⁹」とする。この解釈は、

述べられた「他者の過失」の真偽は問わない如くである。しかし、同じ空衣派でも、Māc 1.12に出現する *pesuṇṇa* に対するヴァスナンディの説明は「過失なき者の過失の表明」で⁴⁰、発話内容が虚偽である事が明言されている様にも見える。一方で同11.10の *pisunattana* には、ヴァスナンディは「過失がないのであれ過失を伴うのであれ、他者の過失を表明する事」とし、表明される過失の実在性如何を問わない⁴¹。白衣派では、例えば *AupA* は「密かに、実在する過失を／正しい人の過失を暴露する」とあり⁴²、*sad* の意味が明確でないが、前者なら述べた事の真偽は全く問わない事になる。また、TAS (U) は *garhā* の例に *paīṣunya* を挙げるが、TAS (S) はこれを「他者たちを、諸々の急所 (*marman*) のところで突くなら *piṣuna* と言われ、その状態が *paīṣunya* である。現に発せられる夫々の言葉により他者の喜びが打ち倒されるなら、それは全て *paīṣunya* に結びついている⁴³」とするから、言明自体の真偽を問うていない事が明白である⁴⁴。

(4-1-4) は「笑いをもたらす (*hāsāvaha*)」とするのみで、(4-1-5) も特に参考となる点はない。

なお、以上の4項目のうち(4-1-1)と(4-1-2)については、その逆である *akakkasa* と *añiṭṭhura* な言葉が、言語活動に属する模範的態度 (*vāiyaviṇaa*) の一つとして *BhĀ 125 = Māc 5.180* で列挙され、また(4-1-1)(4-1-3)(4-1-4)は会話の用心 (*bhāsāsamii*) において避けるべき項目として、*Māc 1.12 ≠ NS62* で列挙される。

更に、ここで挙がる(4-1-3)(4-1-5)と、後に挙がる(4-3-1)は、仏教の十不善業道における語の四業のうち、夫々パーリ語で挙げると *pisuṇā vācā*、*samphappalāpa*、及び *pharusā vācā* と対応する事が注目される。但し仏教の場合、また池田(1939)が指摘した、身語意の十業に関し類似した分類を示す *MBhār XIII 13.4ab*⁴⁵ や *MDhŚ XII 6*⁴⁶ の例、更に島(1987)の指摘した *Nyāyabhāṣya* の例でも、三業と虚言 (*musāvāda*, *anṛta*) は並列的に説かれ、虚言の概念下にこれら3つを包摂しない事には注意する必要がある⁴⁷。

2.2 罪過を伴う言葉

*jatto pāṇavadhādī dosā jāyaṃti sāvajjavayaṇam ca*⁴⁸

avicārittā theṇaṃ theṇa tti jah' evam-ādīyaṃ (825)

(4-2-1) 罪過を伴う言葉とは、そのせいで生命体殺害などの諸過失が生まれるものである。例えば、熟慮することなく、泥棒を「泥棒である」という、この様な事などである。

アパラージタ (p.502) 曰く、罪過を伴う言葉とは、例えば「大地を掘れ (*prṭhivīm khana*)」という発言である。大地の掘削を命じるとそこに住む諸生命体が必然的に殺される。つまり、発言の真偽を問わず、それが別の罪過の誘因となる言明を指すと考えられる。尤も、2行目の実例の意図はさほど明確ではない。別の訳の可能性として、*theṇaṃ* を *avicārittā* の目的語と解し、「泥棒について〔真に泥棒か否かを〕熟考する事なく、泥棒だと言う」とも考えられる。しかしアパラージタは、「〔1行目に挙げた〕この様な事などの諸々〔の言葉〕を『この様に言うことは適切か否か』と熟考せず、あるいは『この言葉によって過失があるか否か』と探求せず、泥棒を『この者

は泥棒だ』と語る事⁴⁹』とするから、その者が泥棒である事自体は事実と見做している如くである。

するとこれは、Das 7.11-12の「全く同様に、長上を傷つける荒い会話は、それがたとえ真実でも言うべきではない。悪〔業〕の到来があるから（11）。全く同様に、隻眼の者を『隻眼だ』と、あるいは去勢者を『去勢者だ』と、あるいは病人を『病気の者だ』と、あるいは泥棒を『盗人だ』と言うべきではない（12）」⁵⁰と同趣旨の可能性があろう⁵¹。ある言明自体は真実でも、言明された対象を傷つける可能性があるならそれは虚偽に等しい、という観念を反映したものではなかろうか。

空衣派文献では、PSU 97が対応し、そこでは殺生等を生み出す原因となる発言が羅列される⁵²。一方、ŚrA 6.53では「色とりどりの区分を有する、罪過を伴う諸 ārambhaが発生する」とする⁵³。また、PSU101では「消耗品・耐久品⁵⁴を成就させるだけのsāvadya」を避け得ずとも構わない事が述べられる⁵⁵が、PSUは在家戒マニュアルであり、在家生活を行なう以上sāvadyaな言葉は避け難い — PSU97で挙げる vāṇijyaという語を在家信徒が避ける事は難しかろう — 事実配慮したものであろう。また白衣派では、ĀPV520の1行目が対応し、「そこから殺生等の諸過失が生まれるなら、それがここでは罪過を伴うものである」(jatto pānavahādī dosā jāyaṃti tam iha sāvajjam) とある。

2.3 好ましくない言葉

parusaṃ kaḍḍayaṃ vayaṇaṃ veraṃ kalahāṃ ca jaṃ bhayaṃ kuṇai

uttāsaṇaṃ ca hīlaṇaṃ appiyavayaṇaṃ samāseṇaṃ (826)

(4-3-1) 荒い言葉 (4-3-2) 辛辣な言葉 (4-3-3) 敵意や (4-3-4) 喧嘩や (4-3-5) 恐怖や (4-3-6) 震撼や (4-3-7) 軽蔑を作る言葉が、要約すると (4-3) 好ましくない言葉である。

本詩節も鍵語の羅列に終始し、またアパラージャもこの詩節には注釈していない⁵⁶。何れにせよ各語彙のニュアンスを理解するには個別の研究を必要とする。なお本詩節は ĀPV 520の2行目に対応するが、appiyavayaṇaṃ ca tahā kakkasapesuṇṇa-m-āyāṃ とあり、appiyavayaṇa の内実は BhĀ 824の「非難される言葉」のそれである。この相違がヴィーラバツダ自身に拠るものか、ヴィーラバツダが他の資料に依って改変したのかは不明である。また、PSU 98も7種類のapriyavacanaを挙げる⁵⁷が、(1) 不快arati (2) 恐怖bhīti (3) 倦怠kheda (4) 敵意vaira (5) 憂いśoka (6) 喧嘩kalahā (7) 苦痛tāpa、を作る (kara) ものとされ、(1) (3) (7) はBhĀ と語彙上一致せず、意味上も重なり合うとは言い難く問題が残る。一方、ŚrA 6.54のapriyavacanaの定義はkarkaśaやniṣṭhura という語が見える⁵⁸が、これはBhĀ でのgarahidavayaṇa のそれに近い。

以上の箇所における文献間の対応を、内容の相違は措いて簡単に示せば以下の通り：

BhĀ	ĀPV	TAS(U)	YŚSV	PSU	ŚrA
818	○	○	○	×	○
819	×	×	×	○	×
820	○	○	○	×	○
821	×	×	×	○	×
822	○	○	○	○	○
823	△(分類が2種のみ)	*分類自体が 存在しない	○	○	○
824	×		○	○	○
825	○		○	○	○
826	○		○	○	○

内容だけでなく、分類自体もBhĀを完全に踏襲したものは存在しない。ĀPVがBhĀと非対応の部分は、821詩節までに限って言えばTAS(U)と重なり、ヴィーラバッダはTAS(U)が示す白衣派説を採って819・821詩節の内容を導入しなかった可能性もあるが、823詩節以降について、彼が2分類にした意図は現時点では不明である。また819-821詩節におけるPSUとŚrAの対応の相違についても、各著者の思惑を更に検討する必要がある。

3. 語るべき言葉

以上で、シヴァーリアによるasamtavayānaの分類と説明は終了し、その内容の纏めが述べられる：

*hāsabhayalohakohapadosādīḥiṃ tume payatteṇa*⁵⁹

evaṃ asamtavayaṇaṃ pariharidavvaṃ viseseṇa (827)

笑い・恐れ・貪り・怒り・嫌悪⁶⁰などによる、この様な「正しくない言葉」を、お前は特に努力して除去するべきである。

827詩節が BhP 97 = ĀPV 517と類似する事は前述 (⇒ 1.) したが、「正しくない言葉」の要因となるものはhāsa / koha / loha / bhaaの他にpadosaが足され、更に「など (ādi)」とある事から、BhĀは更に多い要因を想定している。「など」はアパーラジタも説明せず、その内実是不明である。例えばPaṇṇ 863が列挙する、虚言を行なう10種の要因⁶¹の内の5つにBhĀのこれらが対応する事を考慮すると、シヴァーリアの時代に白衣派で伝承されるものに近いが、同一の一覧が存在し、その一覧が念頭にあった可能性がある。

次にBhĀは、これとは逆に、語られるべき言葉について説明を加える：

tavvivarīdaṃ saccaṃ kajje kāle midaṃ savisae ya

bhattādīkahārahiyaṃ bhaṇāhi taṃ ceva ya suṇāhi (828)⁶²

為されるべき行為について、(1) それ (= asamtavayāna) とは逆で、(2) 真実で、(3) 適時に⁶³、(4)

〔言葉の量が〕限定的で、(5)〔お前〕自身の〔知識の〕枠内で⁶⁴、(6) 食事などの会話⁶⁵を避けた〔言葉〕をお前は述べよ。そして他ならぬそういう〔言葉〕をお前は聞け。

(2) 真実 (sacca) を語るのは当然だが、それは語るべき言葉の属性の一つに過ぎない。827 詩節までに述べた内容の事柄を避け、更に語るべき時や言葉の量、自分の知識の範囲、語るべき話題の内容に配慮しつつ言葉を選ぶ必要がある。更に此処では、そういった言葉を自らが語るだけでなく、そういった内容の言葉を聞く事も命令されている事が注目されよう。上記の言葉を語り得る人間は限られる筈で、実質上優秀なジャイナ僧に限定されざるを得ない。要するに話を「聞く相手」の選択も要請されている事になる。一方、出家者の会話態度の一つとして、ジャイナ教では既に白衣派古層経典で「問われなければ語るべからず (apucchio na bhāsejjā)」(Das 8.46a) とされるが、BhĀ は「他者の、あるいは己の、ダルマに適う行為が現に散る時は、問われていなくとも、他の者たちに問われている者として喋れ」(aṇṇassa appaṇo vā vi dhammie viddavaṃṭae kajje / jaṃ pi apucchijjāṃto aṇṇehī ya pucchio jampa //830//) とあり、正法護持の為には寧ろ自発的に語る事が要請される点も、注意する必要があるだろう。

4. おわりに

以上、asamṭavayaṇa の概念を核に、BhĀ における真実語の掟を検討した。単なる真・偽という分類だけでなく、倫理的・道義的な適切さ・正しさという観点から、「会話のマナー」の一環として、真実語という概念が編成された事実が垣間見えたかと信じる。この後、846詩節までシヴァーリアは真実が有する種々の力や美徳、逆に虚偽が有する害悪について列挙する。これら残余の詩節の検討、及び今回の箇所で鍵語として出現した各語彙の概念分析については、後日に譲りたい。

【謝辞】

本稿は平成24年度科学研究費補助金（若手（B））による研究成果の一部である。また筆者が主催する BhĀ 研究会の参加者である稲葉維摩と名和隆乾の両氏には種々のご助言を賜った。ここに記して深く感謝したい。

【一次文献及び略号】

ĀPV *Ārāhanāpaḍāyā* by Vīrabhadda.

Puṇyavijaya & Amritlāl Mohanlāl Bhojak, *Paiṇṇayasuttāiṃ* Part II, Jaina-Āgama-Series 17-2, Bombay, 1987.

Utt *Uttarajjhāyā*.

Puṇyavijaya & Amritlāl Mohanlāl Bhojak, *Dasaveyāliyasuttam, Uttarajjhayaṇāiṃ and Āvassayasuttam*,

- Jaina-Āgama-Series 15, Bombay, 1977.
- Aup *Aupapātika*
Municandra, *Uvavāisuttam*. Jaina-Āgama-Series 7-1, Mumbai, 2012.
- AupA Abhayadeva's Commentary on Aup
⇒ Aup.
- Ṭhān *Ṭhāṇaṃgasutta*.
Jambūvijaya, *Ṭhāṇaṃgasuttam and Samavāyāṃgasuttam*, Jaina-Āgama-Series 3, Bombay, 1985.
- TAS (U) Auto-commentary on the *Tattvārthādhigamasūtra*.
Mody Keshavlal Premchand, *Tattvārthādhigama by Umāsvāti*, Calcutta, 1903ff.
- TAS (S) Siddhasena's commentary on the *Tattvārthādhigamasūtra*.
Hīrālāl Rasikdās Kāpadā, *Tattvārthādhigamasūtra A Treatise on the Fundamental Principles of Jainism Part II --- Chapters VI-X*, Sheth Devchand Lalbhai Jain Pustakodddhar Fund Series No.76, Surat, 1930.
- Das *Dasaveyāliya*.
Punyavijaya & Amritlāl Mohanlāl Bhojak, *Dasaveyāliyasuttam, Uttarajjhayanāim and Āvassayasuttam*, Jaina-Āgama-Series 15, Bombay, 1977.
- DasC *Dasaveyāliya-Cūrṇi* by Agastyasiṃha.
Punyavijaya, *Sayyambhava's Dasakāliyasuttam with Bhadrabāhu's Niryukti and Agastyasiṃha's Cūrṇi*, Prakrit Text Society Series No.17, Ahmedabad, 2003 (rep.).
- NS *Niyamasāra*.
Uggar Sain, *The Sacred Books of the Jainas Vol.IX Niyamasara (The Perfect Law) by Shri Kunda Kunda Āchārya*, Lucknow, 1931.
- Paṇṇ *Paṇṇavanā*.
Punyavijaya, Dalsukh Mālvaṇiā and Amritlāl Mohanlāl Bhojak, *Paṇṇavaṇāsuttam*, Jaina-Āgama-Series 9, Bombay, 1969.
- PSU *Puruṣārthasiddhyupāya* by Amṛtacandra.
Paṃ. Ṭoḍaramalājī et al., *Śrīmad-Amṛtacandrācārya-viracita Puruṣārthasiddhyupāya*, Śrīmad Rājacandra Jaina Śāstramālā 7, Agas, 1977.
- BhĀ *Bhagavatī Ārāadhanā*.
Kailāścandra, *Ācāryasrī Śivārya viracit Bhagavatī Ārāadhanā*, Jīvarāj Jain Granthamālā Hindī Vibhāga Puṣpa 36, Solapur 2004. [J本, アパラージタ注はこれによる]
Śrī Śivakoṭi ācārya viracit Mūlārāadhanā, Śrī Svāmī Devemdrakīrti Digambara Jaina Granthamālā 2, Solapur, 1935. [D本, アミタガティのサンスクリット詩節はこれによる]
- BhP *Bhattaparinnā*.
Punyavijaya & Amritlāl Mohanlāl Bhojak, *Paiṇṇayasuttāim* Part I, Jaina-Āgama-Series 17-1, Bombay, 1984.

- MDhŚ *Mānavadharmasāstra*.
Patrick Olivelle, *Manu's Code of Law: A Critical Edition and Translation of the Mānava-Dharmaśāstra*, Oxford, 2004.
- MBhār *Mahābhārata*.
Ramachandra Narayan Dandekar, *The Anuśāsanaparvan: Being the Thirteenth Book of the Mahābhārata the Great Epic of India*, Poona, 1966.
- Māc *Mūlācāra*.
奥田清明 「Mūlācāra第一章」『印度学仏教学研究』22-2, 1974, 1060-1045. [1章]
Kiyooki Okuda, *Eine Digambara-Dogmatik: Das fünfte Kapitel von Vaṭṭakeras Mūlācāra*, Alt-und Neu-Indische Studien 15, Wiesbaden, 1975. [5章]
Kailāścandra et al., *Śrīmad Vaṭṭakerācārya praṇīta Mūlācāra*, 2 vols., Jñānapīṭha Mūrtidevī Jaina Granthamālā prākṛta granthāṅka 19-20, 1984. [ヴェアスナンデイ注]
- YŚSV Svopajñāvṛtti on the *Yogaśāstra* by Hemacandra.
Jambuvijaya, *Yogaśāstram First Part (Pratham and Dvītiya Prakāśa)*, Delhi, 2009.
- RV *Rājavārtika* by Akalaṅka.
Mahendra Kumar Jain, *Tattvārtha-vārtika [Rājavārtika] of Śrī Akalaṅkadeva Part 2*, Jñānapīṭha Mūrtidevī Jaina Granthamālā Sanskrit Granthāṅka 20, New Delhi, 1999.
- ŚrA *Śrāvākācāra* by Amitagati.
Pam. Hīrālālajī Śāstrī, *Śrāvākācāra-Saṃgraha*, prathama bhāga, Jīvarāja Jaina Granthamālā Himḍī vibhāga puṣpa 27, Solapur, 2001.
- SDhA *Sāgāra Dharmāmṛta* by Āśādhara.
Kailāścandra, *Paṇḍitapravara Āśādhara viracita Dharmāmṛta (Sāgāra)*, Mūrtidevī Jaina Granthamālā Saṃskṛta Granthāṅka 47, New Delhi, 2000.
- SB *Sukhabodha* by Bhāskaranandi.
A. Shantiraja Sastri, *The Tattvartha Sutra of Sri Umāsvāmi with the Sukhabodha of Sri Bhāskaranandi*, University of Mysore Oriental Library Publications Sanskrit Series No.84, Mysore, 1944.

【二次文献】

Caillat, Collette

(1981) “Notes sur les variantes dans la tradition du *Dasaveyāliya-sutta*,” *Indologica Taurinensia* 8-9, 71-83.

(1991) “The Rules Concerning Speech (bhāsā) in the Āyāranga- and Dasaveyāliya-Suttas,” *Aspects of Jainology: Vol.III Pt. Dalsukh Bhai Malvania Felicitation Volume I*, Varanasi, 1-15.

Flügel, Peter

(2009) “Power and Insight in Jain Discourse,” *Logic and Belief in Indian Philosophy = Warsaw Indological Studies* 3, 85-217.

- (2010) “Truthfulness and Truth in Jaina Philosophy,” *Anusandhān* 50-2, 166-218.
- 藤永 伸
(2006) 「ニクシェーパ」『ジャイナ教研究』12, 1-16.
- 平川 彰
(1994) 『平川彰著作集第16巻 二百五十戒の研究Ⅲ』東京：春秋社.
- 堀田 和義
(2012) 「Umāsvātiに帰せられる4つのシュラーヴァカ・アーチャーラ文献」『印度学仏教学研究』61-1, 300-296.
- 池田 澄達
(1939) 「十戒について」『仏教研究』3-2, 95-97.
- Kawasaki, Yutaka
(2012) “Vīrabhadra’s *Ārāhaṇāpaḍāyā*: A Preliminary Report,” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 60-3, 1161-1168.
- Oetjens, Karl
(1976) *Śīvāryas Mūlārādhānā: Ein Beitrag zur Kenntnis der Sterbefasten-Literatur der Jainas*. Hamburg.
- 島 義徳
(1987) 「ニヤヤー学派における倫理思想」『印度学仏教学研究』35-2, 984-981.
- Schubring, Walther
(1935) *Die Lehre der Jainas nach den alten Quellen dargestellt*. Berlin & Leipzig.
- Varṇī, Kṣu. Jinendra
(1970) *Jainendra Siddhānta Kośa* Vol.I (a-au), New Delhi.
- Wiley, Kristi Lynn
(2000) *Aghātiyā Karmas: Agents of Embodiment in Jainism*, Doctoral dissertation, University of California, Berkeley.
- Williams, Richard
(1963) *Jaina Yoga: A Survey of the Medieval śrāvakācāras*, London.

¹ pariḥara asaccavayaṇaṃ savvaṃ pi cauṃvīhaṃ payattenāṃ / saṃjamavaṃtā vi jao bhāsādoṣeṇa lippaṃti //

² savvaṃ bhaṃte! musāvāyaṃ paccakkhāmi, se kohā vā lohā vā bhayā vā hāsā vā ... 「幸ある方！私は全ての虚言を放棄します。それが怒りからであれ、貪りからであれ、恐れからであれ、笑いからであれ...」。同様の4分類はUtt 25.24にも見られる。

³ Williams がYŚ 自体に言及があるかの如く記すのは誤解を招く。当該部分におけるWilliamsの記述はしばしば不正確だが、本稿ではそれらについて逐一指摘はしない。

⁴ Williamsが言及しない空衣派系TAS注釈では、RV (p.542) が当ストラを“mithyāṇṛtam”と短縮すべし、

という反論への答論中、明確な区分として提示するのではないが、viparīta を (1) bhūtanīhava (2) abhūtodbhāva に分け、更に (3) prāṇipīdakara を挙げる。但し (1) (2) の実例はTAS (U) のそれとほぼ同一で、(3) は実例を欠く。プーリヤパーダ、ヴィドヤナンディ及びシュルタサーガラの注釈にはこの様な分類は見いだせないが、バースカラナンディのSBはRVをほぼ踏襲する。なおSBの参照に際し、名和隆乾氏の手を煩わせた。

⁵ Kawasaki (2012). 白衣派にない概念を借用した他の例については Kawasaki (2012:1165f.) を見よ。

⁶ 注釈者については Oetjens (1976:27-30) を見よ。アマタガティはBhĀ 各詩節に対し、その内容を踏まえたサンスクリット詩節を編んだ。もう一人の注釈者であるアーシャーダラは、当該部分に注釈を記していない。

⁷ SDhAは13.44への自注で同様の分類を述べるが、その内容はYSSVに準じ、用語としてはŚrAのそれを用いたり、PSUを全面的に引用し、目新しい事は殆どないため、本稿では引用しない。YSSVもTAS (U) を基本的に踏まえているので、言及は特に必要な場合に限る。

⁸ sambhūda はSkt. sadbhūta であろう。アパラージタ (p.499): sato 'rthasya.

⁹ Wiley (2000:308-312) を参照せよ。

¹⁰ So ed., read sadapalapaṇa? Williams (1663:72) はsadapalapaṇa 「真実を言わない事」という読みを引く。

¹¹ tadapalapaṇam dviṭīyaṃ vitatham kathayanti tathyavijñānāḥ / sṛṣṭisthitilayayuktaṃ kiñcin nāstīti yad abhihitam //

¹² これは白衣派所伝のストラ番号である。空衣派所伝では7.14になる。

¹³ nāsty ātmā nāsti paraloka ityādi bhūtanīhavaḥ.

¹⁴ p.325: bhūtanīhavo yathā nāsty ātmā, nāsti punyam, nāsti pāpaṃ cetyādi.

¹⁵ 1行目paḍisedhoはJ本ではpaḍisedheとあるが、D本の読みを採用する。2行目は、J本ではavicāriya ṇatthi iha ghaḍo tti taha evam-ādīyaṃ、D本では avicāriya ṇatthi iha ghaḍo tti jaha evam-ādīyaṃ とあるが、いずれもunmetreである。今は822詩節や825詩節を参照して訂正した。

¹⁶ アパラージタ (p.500) はvivādabuddhīe という原文を引き、svabuddhya と説明するが、この説明の意図は理解し難く、何らかの混乱があるかもしれない。アパラージタの解釈が原文伝承に影響を及ぼした可能性も考え得るが、今はJ・D本の読みそのままとした。

¹⁷ 藤永 (2006) 及びそこで挙がる諸研究を参照の事。「萌芽形」という語も同論文に負う。

¹⁸ svakṣetrakālabhāvaiḥ sad api hi yasmin niṣiddhyate vastu / tat prathamam asatyaṃ syān nāsti tathā devadatto 'tra //

¹⁹ 但し、PSUでは3 nikṣepaに「自分の (sva-)」が添付され、次詩節では「他人の (para-)」が付加される。

²⁰ DasC のeditor が想定する原文を踏まえ再構成すると以下の通り: se ta musāvāte catuvvīhe, tamjahā --- davvato khettato kālato bhāvato. davvato savvadavvesu, khettato loge vā aloge vā, kālato diyā vā rāto vā, bhāvato kohaṇa vā lobheṇa vā bhaṭeṇa vā hāseṇa vā. なおこの異伝承は、Caillat (1981:81f.) により知り得た。

²¹ 2行目は、J本では avicāriya atthi iha ghaḍo tti jaha evam-ādīyaṃ と、D本では avidhāriya atthi iha ghaḍo tti jaha evam-ādīyaṃ とあるがいずれもunmetreであり、訂正した。注15も見よ。

²² Wiley (2000:310) を参照せよ。

²³ asadubbhāvanam ādyaṃ vacanam asatyaṃ nigadyate sadbhīḥ / aikāntikāḥ samastā bhāvā jagatī ti vijñeyam //

²⁴ śyāmākataṇḍulamātro 'yam ātmā aṅguṣṭhaparvamātro 'yam ātmā ādityavarṇo niḥkriya ity evam-ādy

abhūtoḍbhāvanam.

²⁵ biiyam asabbhūyakahā saṃti jahā bhuvanākattāro //

²⁶ asad api hi vasturūpaṃ yatra parakṣetrakālabhāvais taiḥ / udbhavyate dviṭīyaṃ tad anṛtam asmin yathāsti ghaṭaḥ //

²⁷ yo gāṃ bravīty aśvam aśvam ca gaur iti.

²⁸ viparītam idaṃ jñeyaṃ ṛṭīyakaṃ yad vadanti viparītam / sagraṇthaṃ nirgraṇthaṃ nirgraṇthaṃ apīḥa sagraṇthaṃ //

²⁹ vastu sad api svarūpāt pararūpeṇābhidhīyate yasmin / anṛtam idaṃ ca ṛṭīyaṃ vijñeyaṃ gaur iti yathāśvaḥ //

³⁰ sāvadyāpriyagarhyaprabhedato nindyam ucyate tredhā / vacanaṃ vitathaṃ dakṣair janmābdhinipātane kuśalam //

³¹ garhitam avadyasaṃyutam apriyam api bhavati vacanarūpaṃ yat / sāmānyena tredhā matam idaṃ anṛtaṃ tuṛīyaṃ tu //

アムリタチャンドラが、「これは虚言に等しい (tuṛīya)」と言う点に注意せよ。

³² garheti himsāpāruṣyapaiśunyādiyuktaṃ vacaḥ satyam api garhitam anṛtam eva bhavati. ウマースヴァーティが「真実であっても非難される言葉ならば虚言に他ならない」とする事に注意せよ。

³³ sāvajjam aṇegavihaṃ vayanam asaccaṃ cautthaṃ tu //

³⁴ ihaloiyaparaloiyadosā je hoṃti aliyavayanassa / kakkasavadaṇādīṇa vi dosā te ceva ṇādavvā //

³⁵ J本・D本共に kakkassa- とあるが、訂正する。

³⁶ paiśunyahāsagarbhaṃ karkaśam asamañjasaṃ pralapitaṃ ca / anyad api yad utsūtraṃ tat sarvaṃ garhitaṃ gaditam //

³⁷ himsanatādanabhīṣanasarvasvaharaṇapurahasaraviśeṣam / garhyavaco bhāṣante garhojjhitavacanamārgajñāḥ //

³⁸ p.502: karkaśavacanam nāma sagarvavacanam iti kecid vadanti anye asatyavacanam iti.

³⁹ p.502: pradośasūcanaparaṃ vacanaṃ paiśunyavacanam.

⁴⁰ vol.1, p.18: nirdośasya doṣoḍbhāvanam.

⁴¹ vol.2, p.184: parasyādośasya vā sadośasya vā doṣoḍbhāvatvaṃ pṛṣṭhamāmsabhakṣitvaṃ.

⁴² p.139: pracchannaṃ sadośāviśkaraṇam.

⁴³ p.74: marmasu tudan parān piśuna ucyate, tadbhāvaḥ paiśunyam / yena yena vacasocāryamāṇena parasya pṛītir vihanyate tat sarvaṃ paiśunyayuktaṃ iti /

⁴⁴ なお仏教における同語の理解については、平川（1994:82-92）を参照のこと。

⁴⁵ asatpralāpaṃ pāruṣyaṃ paiśunyam anṛtaṃ tathā /

⁴⁶ pāruṣyam anṛtaṃ caiva paiśunyam caiva sarvaśaḥ / anibaddhapralāpaś ca vāṇmayam syāc caturvidhaṃ //

⁴⁷ なお、アマタガティによるサンスクリット詩節では、paruṣaがここに含められ、また2行目のvipalāpaがīrṣyāparamasambandhaṃになる：karkaśam niṣṭhuraṃ hāsyam paruṣam piśunaṃ vacaḥ / īrṣyāparamasambandhaṃ garhitaṃ sakalaṃ matam //839//

⁴⁸ J本・D本共にこの様にあるがunmetre である。今の所、これの解決方法は見いだせていない。

⁴⁹ p.502: ity evam-ādikāni avicāritā avicārya kim evaṃ vaktuṃ yuktaṃ na veti, athavā doṣo 'nena vacasā na veti aparīkṣya cauraṃ cauro 'yam iti kathanam.

⁵⁰ taheva pharusā bhāṣā gurubhūovaghāinī / saccā vi sā na vattavvā jao pāvassa āgamo //11// taheva kāṇam kāṇe tti paṇḍagaṃ paṇḍage tti vā / vāhiyaṃ vā vi rogī tti teṇaṃ core tti no vae //12//

⁵¹ この詩節に関しては、Caillat (1991:11) を参照せよ。但しYŚSVは「隻眼を隻眼と言う」を *apriyā garhā* の例とする (p.325: *dvitīyā apriyā kāṇaṃ kāṇaṃ iti vadataḥ*)。

⁵² *chedanabhedanamāraṇakarṣaṇavāṇijyacauryavacanādi / tat sāvadyaṃ yasmāt prāṇivadhādyāḥ pravartante //*

⁵³ *ārambhāḥ sāvadyā vicitrabhedā yataḥ pravartante / sāvadyaṃ idaṃ jñeyaṃ vacanaṃ sāvadyavitrastaiḥ //*

⁵⁴ *bhoga / upabhoga* の訳語は、ひとまず堀田 (2012:298 [注5]) に従う。

⁵⁵ *bhogopabhogasādhanamātraṃ sāvadyaṃ akṣamā moktum / ye te 'pi śeṣaṃ anṛtaṃ samastam api nityam eva muñcantu //*

⁵⁶ アミタガティの対応サンスクリット詩節は以下の通りである：*avajñākāraṇaṃ vairakalahatrāsavaraddhakam / aśravyaṃ kaṭukaṃ jñeyaṃ apriyaṃ vacanaṃ budhaiḥ //841//*

⁵⁷ *aratikaraṃ bhītikaraṃ khedakaraṃ vairaśokakalahakaram / yad aparam api tāpakaraṃ parasya tat sarvam apriyaṃ jñeyaṃ //*

⁵⁸ *karkaṣaṇiṣṭhurabhedanavirodhanādibahubhedasaṃyutam / apriyavacanaṃ proktaṃ priyavākyapravaṇavāṇikāḥ //*

⁵⁹ *-padosādīḥiṃ* はJ本・D本共に *-ppadosādīḥiṃ* とあるが訂正する。あるいは、*-ppadōsādīḥiṃ* と読まれていた可能性もある。また *tume* は両本共に *tu me* と 2 語にされているが、訂正する。

⁶⁰ アパラージタ (p.502) は *pradoṣa* と Skt. 化するが、*pradveṣa* と理解した。

⁶¹ *mosā ṇaṃ bhaṃte! bhāsā pajjatiyā kativihā paṇṇattā? goyamā! dasavihā paṇṇattā, taṃ jahā --- kohaṇissiyā māṇaṇissiyā māyāṇissiyā lobhaṇissiyā pejjaṇissiyā dosaṇissiyā hāsaṇissiyā bhayaṇissiyā akkhāyaṇissiyā uvaghāyaṇissiyā*。下線部が、BhĀ 827 に対応する。なおこのリストについては、Flügel (2009:161f.) (2010:171f.) を参照の事。

⁶² 本詩節は ĀPV 522 に若干類似する：*miyamahuram akharam apisuṇam achalaṃ kajjovagaṃ asāvajjaṃ / dhammāhammiyasuhayaṃ bhaṇāhi taṃ ceva ya suṇāhi //*

⁶³ アパラージタ (p.503) は “*āvaśyakādīnāṃ kālād anyatḥ kāla ity akālaśabdenocyate, athavā kālaśabdena prastāva ucyate*” として、原文を *'kāle / kāle* の二様で解釈する。しかしこれは、*bhāsasamiti* 「会話の用心」を規定する、Utt 24.10cd “*asāvajjaṃ mitaṃ kāle bhāsaṃ bhāsejja pannavam*” 「洞察力を持つ者は、罪過なく計られた会話を、適時に行なうべし」の平行表現の類と考えられる。なおアミタガティのサンスクリット詩節では *viparītaṃ tataḥ satyaṃ kāle kārye mitaṃ hitam / nirbhaktādikathāṃ brūhi tad eva vacanaṃ śṛṇu //843//* とある。

⁶⁴ Cf. Das 7.8: *aīyammi ya kālammī paccuppanna-m-aṇāgae / jam aṭṭhaṃ tu na jānejjā evam eyaṃ ti no vae //* 「そして、過去・現在・未来時においてある事柄を知らないなら、〔それを〕『それはしかじかである』と述べるべきではない」。アパラージタ (p.503): *bhavato jñānasya viṣaye pravṛttaṃ vacanaṃ*。アミタガティのサンスクリット詩節では、*savisae* にあたる語は省かれている (前注参照)。またアパラージタは、この直後に「諸々の言葉とは知に他ならない、という趣旨である」(*jñānam eva vacanāṇīti yāvat*) と述べるが、これはジャイナ教徒の言語観を知る上で興味深い例と思われる。

⁶⁵ 「など」についてアパラージタ (p.503) は *bhaktacorastrīrājakathādirahitaṃ* とするが、この「食」「窃盗」「女」「王」の4区分は Thāṇ 282 (p.111) で4つの *vikahā* (Skt. *vikathā*) として列挙される。

(かわさき ゆたか：人間文化研究所 客員研究員)

